国語　京都大学　理系学部（前期）１／３

一

問一

親身に世話してくれた友人の何気ない私への言葉は、単なる批評であることを越え、彼の人柄を通じて私の心を打ち、真の人間関係へと目を向ける契機となったから。

（解答欄３行）

問二

自分のことしか考えられない私は、無邪気であっただけでなく、自分を支えてくれる他者の思いやりに無自覚な点で、それを蔑ろにしていると気づいたということ。

（解答欄３行）

問三

人並みの苦労を知らないで生きてきたということではなく、人との関わりの中で自分を見出し、それを通じて世間の確かなありようを知ることがなかったということ。

（解答欄３行）

問四

書物における他人の言葉は、その抽象的な意味だけが自己の中に残っていくが、生身の人間の言葉は、取り込まれて自らの一部となりながらも独立の実在感を保ち、生きた他者として自己に訴えかけ続ける存在となるから。

（解答欄４行）

©河合塾　2021年

二

問一

五拍と七拍の特殊な連結からなる短歌の音数律は、乱雑で即興的であるゆえに生彩と変化に富んだ日常語の自然なありように反する人工的な定型にほかならないこと。

（解答欄３行）

問二

日頃の思いを非日常的な次元にまで昇華し、それを日常語の自然なリズムとの相克のなかで定型へと凝縮して表現する短歌の困難さは、古代も現代も変わりないから。

（解答欄３行）

問三

斎藤茂吉は、短歌の韻律と親和し自らの詩想に適う言葉を古今東西の語に探り当て、定型に凝縮して表現すべく尽力することで作歌の本質的態度を貫いたということ。

（解答欄３行）

©河合塾　2021年

三

問一

この古歌のここの言葉を自分が今詠むならば、古歌のような巧みな使い方では、詠むことができないだろうよ。

（解答欄２行）

問二

歌会で特に名人の歌は、よく考えて、理解しがたい点を見つけたら人に質問して理解を深めることが、上達のために肝要なのに、理解できないまま放置しているから。

（解答欄３行）

問三

歌は知識を得たり実作したりするより、歌人が集まって議論すると、歌の是非についての見方の違いがはっきりし、自分とは異なる他人の考えを知って上達できるから。

（解答欄３行）

©河合塾　2021年